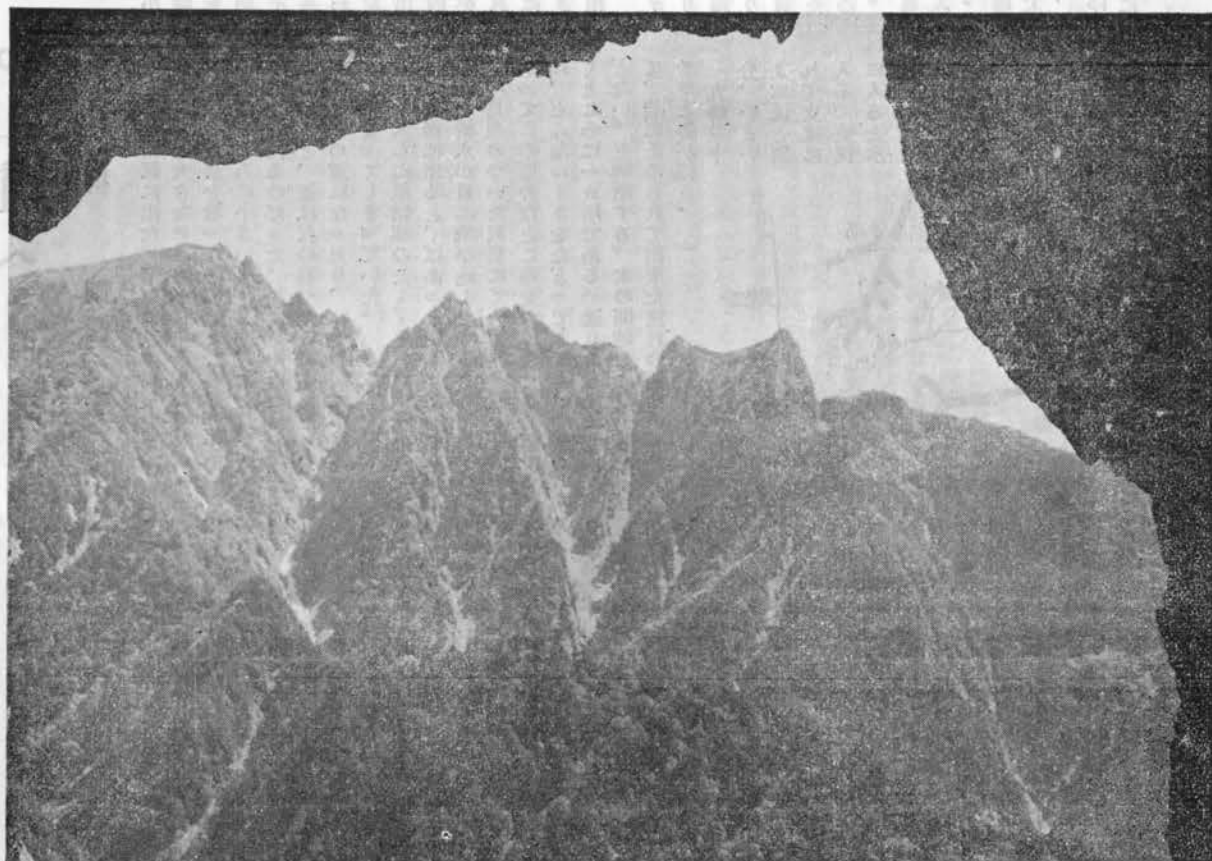


# 山と博物館

第10巻 第10号 1965年10月25日 大町山岳博物館



## 雑感

今年の文化祭の行事として葛飾北斎の浮世絵版画展を行うことになった。有名な富嶽三十六景の展示で山に関係のあるものだからだそう。

版画と云えば日本の版画はその立派な作品の大部分は海外へ持ち出されて日本に現存するものゝ方が少いそうで、外国人によって日本の版画のよさが認められて後になって日本でも認められる結果となったようである。

私達が他県へ旅行をして大町から来たと言えはあゝあの山岳博物館のある大町かとよく云われる事がある。大町に住んでいるとそれほどに感じないがよそでは有名になっている山岳博物館が外国で最初に認められた版画に似ているような気がしてならない。

事実山岳博物館も数々の学術賞を得て日本で唯一つの山岳博物館として果たしてきた功績は大きいのであるが市民の間から時として山岳博物館に対して理解のない言葉を耳にすることがある。勿論山博の関係者は率直にその意見を聞き、反省すべきは反省しなければならぬが、又一方市民に対して山博への理解を深めるべく積極的なPR活動もあってよいのではないかと思う。

北アルプスを一望出来る大変よい位置にありながら交通の便が悪いのも山博にとって大変不利な事と思う。

最近黒部ダムへの観光客の増加と共に山博の入場者も大変増加の傾向にあるが市内の主だったよく目のつく所に、大きな山博への案内板でも作ったら自家用車や観光バスの客をもっと多く山博へ導くことが出来るのではないだろうか。入場者が増し市民の関心がたかまることによって山博の事業も行い易くなるものと思う。とにかく乏しい地方財政のやりくりの中にあつて山岳博物館をここまで育てあげてきた大町市の文化的水準の高さを誘ふと共に増々山岳博物館の発展を期待してやみません。(山博協議会長 荒山幸久)

# 内蔵ノ助平から山荘へ

大町山の会員

黒柳則子

大タテがビンに向った四名を送り出してから我々四名も内蔵の助谷出合のB・Cを七時に出発した。露払いの道はすがすがしい。先ずは内蔵ノ助谷の右岸の道を通って内蔵ノ助平を目指す。すぐに丸山の岸壁下に出た。そして来た道を振り返れば黒部川の向うに赤沢岳の西側の猫の耳岩峰が異様な程、猫の横たわる姿をなして、どっしりと存在する。道の左手のブッシュからは清水がさら／＼と流れ出していた。ささやかな清水に次々と出合う内蔵ノ助平に黒部別山が碧い空にくっきりと姿を見せて始めていた。あのくびれとスバツと切れている向うが大タテガビンのこと。本当に切れている。その頂きが第四峰だ。とリードのTさんが指し示す。丁度豊かな清水に出会ったので一休み。

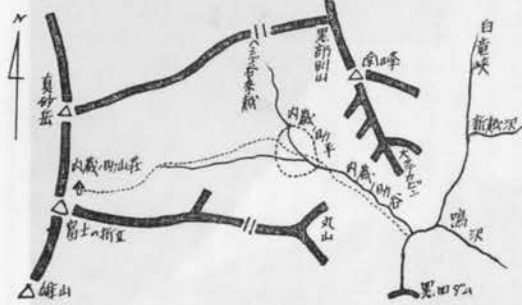
道は次第に沢から離れてダケカンバヤツガなどの森林帯に入ってしまった。両側のかなり丈のある木々が五月の合宿の時雪の上先端しかのぞかせていなかったという今迄の登り道もどうやら平になってきたこの付近が内蔵ノ助平の入口でキャンプサイトとして適した地なのである。この切り開かれたサイトの左の方には内蔵の助平への道がついていた。この道を進ると桃源境といわれている平の奥に踏み入る事になる。我々は右手の道を進み八時三十分、内蔵の助谷の本流と出会った。水量の豊かな本流にかかる吊橋を渡る。橋は針金で作られ、所々、足を踏むように丸木をしぼりつけた簡単なもので、長さ五来程、高さもそれほどでないが、歩く度に大きくゆれ、思わず緊張する。この橋を渡った向側に「内蔵ノ助山荘へ」という指道標と「真砂沢へ」との指道標があり道が二つに分れていた。我々は道標に従って左手に進む。間もなく広

々とした河原に出た。前方に八方尾根のケルンのような大きなケルンが目に入るのでケルンを伝って道を取ってゆく。ところが行手の方々に現われるのだった。ケルンやなな目を追ってゆくと、道は沢の岩づたいに進んだり、ヤブこぎの道になったり、いつの間にか道なき道に変わってしまった。

人の入らぬ原始林のたゞずまいのヤブをぬけて沢筋に出ると、ばあっと明るくなって清らかな清水が目飛び込んで来る。

道の見当のついた沢筋にて一休み。三十分かかってこの厄介なところをぬけた。この箇所は、どんなルートをとっても、ゆきつくところは一カ所である。迷うことはほとんどない。と判断する。木の間越しに陽が洩れて、岩に止められて出来た流れの淵にチラ、チラと影が漂う。

九時三十分、いよいよ本流と別れて支流に入る。支流に入ると水はどこえともなく吸込まれていて、沢は濁れていた。濁れた沢には石がごろ／＼している。その石の上には赤いペンキで矢印が



つてある。矢印をどたりつゝ進む。白っぽい石がかなり続く。石の上に直角の矢印がある地点から左手に曲ると支流とも別れて、又林の中に道は導かれてゆく。

この道は暫くで雪渓に出会った。雪渓は五百米の長さに三十分の巾であると推定する。ここまで進ると前方の視界が開けて来る。立山連峰の明るい峰々が望まれるのだ。真砂岳が右手に、そこから富士の折立に連なる稜線がくっきりと見える。富士の折立は前山に隠れてしまふ。周囲はお花畑となっていて、クルマユリ、ウサギギク、フウロウソウ等、高山植物が夏のなごりの面持で咲いていた。

雪渓を横切るとそこには最後の水場があった。「くらのしげ山荘へ」という立札もあった。ついでながらここより上の案内は総て、くらのしげである。富山弁のせいであるのか。道はいよいよ急坂となる。その上ぬかるみである。登りがきつくなつた途端にお腹もすいてきたので十一時、昼食にする。

歩き始めてすぐに、道の両側にベニバナイチゴのうれた赤い実を見つけた。さあ、忙しい。手に触れるだけでぽろ／＼と落ちてくる程の実を早速口にされる。ひやりと甘酢っぱい味が口の中に広がる。思わぬ贈物にすっかり嬉しくなつて元気がでる。

十五分も歩くと、目の前になだらかな草原が広がってきて高山植物が咲いていた。ハイマツも見え始めた。ここらあたりから高山帯に入るのだ。足許には紫のリンドウ草がかわいらしい。タテヤマリンドウ草。ひっそりとした風情に全く心を動かされる。視界がぐっと開けてくるにつれて展望は素晴らしさを増す。振り返ると黒四ダムが見える。鏡のような水面が碧く光る。鹿島から爺、屏風の峰々、スバリ、針の木と懐かしい頂きが碧空にくっきりと浮び上がる。十二時に富士の折立尾根に出た。はるか下の方に内蔵の助平がひとときわかい緑の色調をなしてあまねく見渡せる。ここから一と飛びに飛び降りてもふわりと足

が地に着きそうな錯覚を起す。高層湿原をなしているという。我々は平の北部を通って来たわけである。

進行方向に大きな岩が現われた。ハイマツの間をぬけて一息にそこまで進る。期待にそむかない未知の風景が広がった。何という広大な風景！真砂岳から富士の折立に連なる稜線がなだらかにすっきりと碧空の一線をなす。砂礫地に残雪が点々と白く美しいコントラストを見せる。本当にのどか。明るくて眩しい。悠々なる。という言葉が浮び、稜線を歩く人の小さな影もひどくロマンチックに思われた。稜線近くまで来ると草原はもうすっかり秋の氣に満ちていた。爽やかに澄む空気が言うまでもなく足元の草の葉は黄ばみ始めてそよ風に揺れていた。岩とハイマツの間をぬけたり、飛んだり、タテヤマリンドウ草の紫に話しかけながら内蔵ノ助山荘を目指す。

この近くのたゞずまいは岩が多くて、白馬大池の苦しかった道を思い出す。「いいなあ」「本当に」と感嘆の声がしきりと皆の口から洩れる。何度も何度も声になってでてしまうのだ。ゆるやかな岩の道を登りつめてようやく十二時三十分、内蔵ノ助山荘に到着する。

結局、山荘は内蔵ノ助谷の乗越のわずかの広々とした所に位置していた。ここまでやって来て、今日の目的である内蔵ノ助山荘への新道が確認できたわけではとす。

山荘の前にはポコン／＼と音をたて、ホースから水が溢れていた。今年には雪が豊富だったので雪解水がふんだんにあるのだろう。手のきれいな冷たさで顔を洗って口に含むと一息に飲み下せない程であった。山荘の御主人はいかに山小屋の主人にふさわしい風貌と心の持主の方だった。富山の声タラの人で狩猟組合長をなさったとか、かもしかの絵のくらのすけ山荘のバツジを頂いた。眺望の良い部屋で温かい御茶を頂く。素足になって、たゞみに触れると、心良い疲れが身体中に残っているのがよくわかった。

# 郷土の地質

〔その1〕

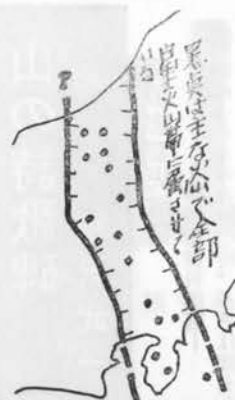
長野県教育センター指導主事 平 林 照 雄

一、あらまし

宇宙開発が盛んなのと平行して、地球の内部を研究する仕事も進められている。地球の内部に関しては、宇宙の場合と同じくらい未知の点が多く、かつ難しい問題が山積している。アメリカでやっている大洋上から、地殻の下にあるマントルまでボーリングして、地殻深部の物質を調べるモホール計画もその内部開発の一環である。地下の研究はさしあたり地質学の文野になる。永年の地殻の変動や地下から噴出してくる火山や、地下に源をもつ地震から地球の内部の様子をある程度まで知ることが出来る。

最近では高校の地学や小中学校の理科で、地質学的な分野を教材として取扱うので、一般の知識も高まりつつある。しかし自然科学の他の知識や理解の程度にくらべると、地質に関しての知識は浅く、理解の程度も低いように思われる。それは、地質が時間的に気の遠くなるような大昔からの出来ごとを考えなければならず、地下の様子を立体的に見なくてはならないからである。また、その現象を直接目で見ることは稀にしか出来ない。まして自分で野外を歩いて地下の様子を判断すると

## ナウマンの大地溝帯



なると大変である。

我々の郷土は、地質学的には全国的に重要な位置にあるので、古くからよく研究されている。しかし、まだまだわからないことが沢山ある。最近では国際地球内部開発計画 (U.M.P.) による団体研究の一つが姫川流域で行われている。地図をみると、糸魚川から静岡にわたって、四ヶ城盆地・仁科三湖盆地・松本盆地諏訪盆地および甲府盆地などの山間盆地がじゅずつなぎに並んでいる。この盆地群は糸魚川・静岡地質構造線に沿っている。この構造線は地形的には、日本アルプスの東側を断層が走っているものと見ることが出来る。

しかし、地質学的には、二五〇キロメートルの全線が断層であると確認されていないし、その詳しい通過点がわかっていないところが多い。この糸魚川静岡線を境にして、地質的には西側を西南日本、東側を東北日本と区別する。長野県の東側には関東山地があり、その西側には岩村田・若神子線とよばれる構造線がある。糸魚川・静岡線と岩村田・若神子線の間には、両側の山地の地質とはかけはなれて新しい地質の部分がある。この部分をエドムンド・ナウマンは一八八五年頃、フォッサ・マグナと名をつけた。日本アルプスや関東山地がすでに陸化している時、フォッサ・マグナは大断層部で海峽状にあっていていた。

この浅海部へ両側の山地から新第三紀層(今から一〇〇〇万年から三〇〇〇万年位前)が堆積し、今は隆起して山地となっている。ナウマンは図のような地帯をフォッサ・マグナと呼んだが、今日では研究が進み、その広がりも、内部の様子も複雑であることがわかって

ている。フォッサ・マグナは諏訪付近で最も狭くて二五軒ぐらいいしかないが、北と南へ行くほど広がり、北部フォッサと南部フォッサに分けられる。諏訪測の南からは、中央構造線と呼ばれる明瞭な大断層が遠く九州に延び、その北側を内帯、南側を外帯という。

中央構造線は糸魚川・静岡線に切られた形になっており、前者の方が古く出来たものである。フォッサ・マグナ内部でも岡谷市横河川流域のように、日本アルプス側にあるような古い地質の部分があり、単純なものではない。また糸魚川・静岡線を境にして、西側は東側と全く時代の異なる地層から出来ていると大まかにはいえるが、詳しく調べると、白馬村の岩茸山南側で筆者が発見した図のような、飛騨山地側の古い地層の上に、フォッサ・マグナ側の第三紀層が不整合ののっているところがある。また諏訪湖の南方の守屋山でも、糸魚川・静岡線の西側に第三紀層がか



なり広く分布している。

このように、研究が進むにつれて、フォッサ・マグナとか、糸魚川・静岡線のように、その言葉は昔ながらに使われているが、その内容が昔とは変わってきた例は沢山である。

安曇の地方は、西側は古い岩石で出来ている飛騨山地で、東側は新しい地質のフォッサ・マグナの中信山地である。この間にはさらに新しい時代に糸魚川・静岡線にそって出来た盆地があり、扇状地が発達している。したがって地形的には明瞭に三区に分することが出来る南北の方向性が強く、これがこの地方の生活にも強く影響を与えている。三区に分された西山・東山および平の地形と地質はかなり相異しており、それぞれが特徴をもっている。

たとえば、西山は三〇〇〇米級の男性的な高山で、登山客でにぎわうが、人間の永住地とはなりたい自然現象のきびしい世界である。各所に温泉が湧出し、東斜面には雪渓が発達しており、狭い我が国ながらもまだ動物や植物にとっては楽園的存在である。北端の風吹岳や南の乗鞍岳のように火山が噴出している部分もある。東山は一〇〇〇米以下の女性的な山地で、風化土壌が厚く粘土質であるため山村が発達し、傾斜地農業が営まれている。全国的な地じり地帯で、水不足、旱魃に悩まされながら不自由な生活が続いている地域である。平の部分、松本盆地と四ヶ城盆地では、飛騨山地から流出した各河川が見事な扇状地を展開し、砂礫質の厚い沖積層を作っている。米作中心の地域で、花崗岩の風化土壌が多いため良質の米を産出している。我々の最も大切な生活舞台にもなっており、人口密度も大きい。佐野坂と鹿島川扇状地の間には仁科三湖があり、断層湖であるために面積の割合に深く、周囲の緑の山々につままれて観光客が多い。以上のような郷土の地質についてのあらましを頭に入れておいて、順を追って地質学的に特筆されるような問題を中心に紹介して行く。

# 山の詩歌碑

福沢武一

## 篠原志都児歌碑

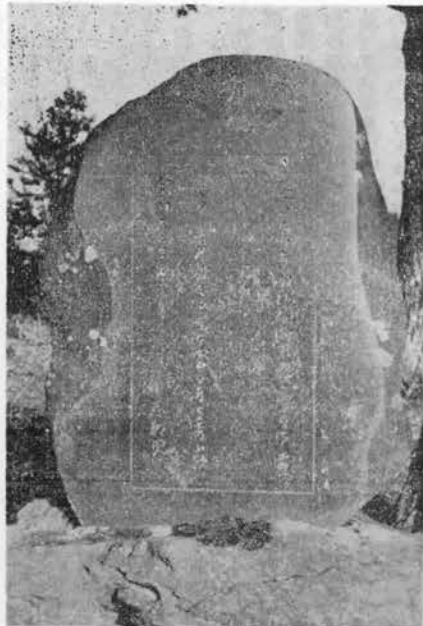
—茅野市夢科山麓—

茅野駅についたのは一〇時。バスは間もなく発車。山浦の傾斜地を走りのぼって行く。車窓から目を離さない。路傍の古びた石神・石仏が目をはきつけるのだ。

起伏の多い耕地は桑畑。その前方は八ヶ岳一つ一つの峰が分離し、その頂は雪が白い。芹が沢の村家を通る。続いて湯川の家並にはいる。北山地区の中心地らしく、店舗が並んでいる。こゝだ、——これから訪れようとしている歌碑の歌人志都児の生れた部落は。

志都児の本名は篠原円太。明治十四年生れ。小学校卒業後、農業に従事して一生を終えた。二三歳、愛妻に死なれ、これを動機に短歌を始め、赤彦と共に諏訪地方の先覚となつた。左千夫・節が度々当地を訪れたのも彼あるがためだつた。

部落の中央で路は右に折れ、いよ／＼山路にかゝる。人気のない雑木の中。谷川につきつ離れつし、やっと通過するのが夢科湖畔の



一かく。季節はずれで、人影とてない閑静さ一坂のぼる。路傍に立っているのが虚子句碑。

ホテルの前で下車。そこから山陰路にさしかゝる。しばらくして高い崖の上、松の根方に碑が立っている。人に忘れられたようなたゞずまい。これがわが志都児歌碑だ。

別荘でも建つのか、削りどられた崖の上に出る。碑面に日光がまともにも当り、松の陰が落ちてゐる。

碑は黒ずんだ自然石。その正面を平らめ、磨き、細いわくの中に次の二歌が並記されている。筆蹟は草稿なのだろうか、——改まらない、そゝけた字体。その師左千夫そっくりな筆使いだ。

夢科の出湯の谷間末遠く雪の御岳山今日さやに見ゆ

志都児

こゝにして見放くる空に雲もなく秀嶺雪山天にきはへり

志都児一代の作品は「アララギ故人歌集」第一(昭和九年)にまとめられている。師に従つて万葉調になすんだきらいはあるが、山村生活を歌いつとけた。夢科山歌も数多い。その中で、碑歌は明治四一年の作。こゝに立つと、今日はさやかにとはいかないが、西真正面に御岳の雪が浮かんでゐる。

志都児はその後二人の妻に生別、死別。二児に先立たれ、父と妹にも死別。その後を追って彼自身も他界した。それは大正六年。三八歳の若さだつた。碑が建てられたのは二二年後。昭和一五年九月のこと。それは碑陰に誌されている。碑の高さは一三八センチ。幅目通り一一〇センチ。自然石の台座にのっている。

長いこと待って待ちくたびれて、松の陰の消えたところ

ここで写真をとる。その頃は西空の曇りが増して碑の字は必ずしも浮き立たない。崖をかけおり、坂道を小急ぎにくだる。温泉地に近い路傍に湧井の水が流れている。よごれた手を洗う。それは温泉の温いこぼれ水だった。



# ノビタキ

長沢修介

燕の姿がいつの間にかやら消えてしまった。毎年八月の下旬電線などに大きく群がって渡り前の憩の一時を、嘯っている風景が見受けられるのだが今年に於いて見かける機会がないまま、燕の姿はなくなつてしまった。又、九月の初旬頃から、秋を告げるモズの高鳴きも今年はさっぱり聞かれず、稲穂が黄

ばみ、紅葉が始まってもついに一声も聞かれず終つてしまふそうだ。

先日、神城村の温泉を訪れてみたが、この地方もモズの高鳴きは少なく、わずか一羽が高鳴きらしき鳴き声をしていただけであった今年の鳥達の繁殖期の頃の異常天候が大きく影響したものかどうか、不思議に思われる。

九月も終りの或る日、もう稲刈もぼつ／＼始まった稲田の畦道を、澄んだ空気に北アルプスの美しい姿にみとれながら歩いていたらノビタキの今年解つた一族に出会つた。

すっかり成長した雛は、もう親鳥とほとんど区別がつかず、五羽の一族は鳴き声も立てずひっそりと、秋の日を浴びて虫をあさっていた。恐らくは北海道の方面で繁殖を終え、こゝまで渡つて来て、翼を休めて少休を取り又南へ渡つて行くこの一族に、無事の旅が出来た様心から祈つた。

## 博物館だより

十一月一日から七日までの一週間、恒例の大町市文化祭に当館では日本浮世絵保存会、酒井藤吉氏のご協力を得て、葛飾北斎の「富嶽三十六景」浮世絵展を開催する。入場料は平常通りで午前八時三十分から午後五時まで公開する。

## 表紙説明

大タテカピンより赤沢岳猫の耳岩峰を望む  
撮影(大町山の会会長)長沢修介

山と博物館 第10巻第10号

一九六五年十月二十五日発行

発行所 長野県大町市TFL(大町)二二一

大町山岳博物館

印刷所 大町市下仲町

大糸タイムス印刷部